

言語社会研究科 博士論文要旨

著者 烏雲畢力格
論文題目 歴史と民族の創成 —17世紀モンゴル編年史における
民族的アイデンティティの形成—
学位取得年月日 2009年6月10日

これまでのモンゴルの歴史における14世紀後半から17世紀半ばまでの「モンゴル・オルス時代」と呼ぶべき時代は、「明代蒙古」、「北元時代」として論じられることが多かったのみならず、「暗黒の時代」として無視することさえ多くみられた。だが、「モンゴル・オルス」時代は、「大元オルス」における中国一代朝廷として性格の延長上で論じられるものではないし、また「暗黒の時代」を字面どおりに解釈して無視することができるものでもない。「モンゴル・オルス」という時代は、新たなモンゴル民族の形成期であった。本論は、17世紀における代表的な四部の編年史をとりあげ、著者たちがチンギス・ハーンの「黄金の一族」をめぐる神話、伝説を含む歴史記憶を仏教的な哲学ロジックによって体系化することで、「黄金家族=ブッダの合一」という国家統治の倫理体系を主張したプロセスを考察した。そして、その「黄金家族」を中心とした信仰が仏教によって宇宙的に再体系化される過程が、新たな民族形成のアイデンティティを特徴づけたことを明らかにした。

第一章では、従来の研究における立場を検討しつつ、「モンゴル・オルス」という視座の重要性を論じた。

「モンゴル・オルス」は大元オルスの後継者として認識されることが多いが、この時代を考察する際には、大元オルスが多民族、多文化ハイブリッド集団としての大モンゴル帝国を継承しているという側面を考えなければならない。それは、大元オルスが中国文明とペルシア文明の二つの古代文明を抱え込んだ大モンゴル帝国を継承しているからである。そのため、従来のように大元オルスの中国の一王朝としての側面のみから「モンゴル・オルス」を「明代蒙古」、「北元」として論じることは間違いである。

大元オルス後の「モンゴル・オルス」は、草原ステップにおける国家体制＝「行国」オルスであったことも重要である。農業文化や、都市文化と違って、草原の奥地を絶えず移動するのが「行国」の特徴である。農業文化や都市文化は一つの地域を中心として、そのまとまりが分かりやすいが、しかし「行国」においては、その中心となる点が定められにくい。この「行国」としての特徴を軽視すると、大元オルス時代の大都（北京）を中心として解釈し、「モンゴル・オルス」の歴史を中国史の付随的問題として片付ける誤りを起こしてしまう。では、「行国」オルスが一つの共同体的人間集団として存在しうる可能性

は何か。モンゴルに限って言えばそれはほかならない「黄金家族」の信仰であった。

「黄金家族」の信仰は、大モンゴル帝国時代には強大な軍事力を背景にわかりやすいかたちで構成されていた。しかし、帝国の継承者としての大元オルス崩壊によって、そもそも分裂の途中にあったモンゴル帝国の解体が加速された。「黄金家族」の信仰は、形成当時の軍事的背景を失い、モンゴルの本土においてさえ「黄金家族」信仰に対する危機が起こったのである。この危機を乗り越えるために、宗教と「黄金家族」の合体が進められた。この変化の過程を考察するには、モンゴル自らの歴史記録を見なければならないが、この考察の手がかりとなるのが、本論が取り扱った四部の編年史を含むモンゴルの歴史記録である。

もちろん「行国」オルスにおける歴史記述の様式は、遊牧生活の特徴に適したものである。四季折々に移動する遊牧社会においては、書物の保存に適した設備もなければ、図書館などを建設する固定の中心地もなかった。そのため、物質的形態をもつ歴史記録より「声の歴史」が圧倒的優勢であった。16世紀以降になると仏教の導入によって、チベット仏教の寺院が建設され、「声の歴史」が物質的形態を獲得し仏教寺院に保存された。物質化した「声の歴史」には、声の文化の特徴が多く残され、文字文化の視点から見ればそれは滑稽にさえ見える。しかし、「声の歴史」が物質形態をとることで、「声の歴史」自体が終焉したわけではない。文字化して記録された歴史は、再び草原の「語り部」たちによって語られた。モンゴリアの本土のみならず、シビル・カン国のアブル・ハチ・バートル・ハーン、モグル帝国のバーブル・ハーンも、帝国時代の記憶を語り続けたのである。

第二章では、16世紀後半にチベット仏教ゲルク派がモンゴルの右翼三トゥメンを支配するアルタン・ハーンによってモンゴルに導入されたあと、モンゴルにいかなる変化をもたらしたか、四部の編年史をてがかりに考察した。具体的には、17世紀に編纂された「四部の黄金史」に反映されたモンゴル帝王の系図、いわゆる「黄金家族」の観念にいかん仏教的意味が再投入されたかを論じた。

大モンゴル帝国時代に形成された「黄金家族」の信仰は、「モンゴル・オルス」時代には大きく挫折した。その背景には、「黄金家族」が手にしていた巨大な軍事力の喪失がある。「黄金家族」の威信を回復することがモンゴル帝国の隆盛を再現することであるというのは、編年史の著者たちの理念であった。そこで編年史は「黄金家族＝ブッダの合一」として歴史記述された。チベット仏教を導入することによって、17世紀モンゴル編年史における「黄金家族」概念は大きく変容した。ブッダの「黄金家族」とチンギス・ハーンの「黄金家族」の系譜的合一が編年史の著者たちの歴史編纂に対する根本姿勢であった。この「黄金家族」概念の変容は、編年史でなされた「黄金家族」に対する仏教的意味の再投入の作業によるものであったが、これは編年史の著者たちの単なる模倣ではなく、モンゴ

ルの歴史家たちの自覚的な歴史刷新の作業であったのだ。

17世紀モンゴルの編年史における歴史記述は13世紀の『モンゴル秘史』と比べて大きな変化を表わしたが、声の文化に基づく記述方式は根強く残った。これは、編年史が「読むための歴史ではなく、聞くための歴史である」という遊牧国家＝「行国」の歴史の特徴を持っているためである。編年史の著者たちは、「黄金家族」を中心とした国家統合の理想を主張するにはチンギス・ハーンの歴史を仏教世界で再構成し、そこにチンギス・ハーンについての歴史事実より民間で広く伝えられていたチンギス・ハーンの伝説神話を大量に注入することで、人々の記憶にあった歴史としてのチンギス・ハーンを蘇らせる効果を果たしたのである。

第三章では、編年史における「二つの喪失」として記述された大元オルスに関する記憶について論じた。第一章でも強調したように、大元オルスの二重の性格をいかに理解するかは非常重要的な問題である。編年史においては、大元オルス時代の終焉は、「40万モンゴルの喪失」と「仏法の喪失」という「二つの喪失」として記憶された。この歴史記憶としての「二つの喪失」は、新たなモンゴル民族が形成される過程で、回復すべきトラウマであったともいえる。

この「二つの喪失」を回復するために、アルタン・ハーンは、チベット仏教を導入した。アルタン・ハーンにとっては、最盛期のモンゴル帝国の歴史記憶とは、フビライ・ハーン時代であり、その隆盛の象徴がチベット仏教であった。また、アルタン・ハーンによって導入された仏教は、フビライ時代のようにハーンの大オールド＝皇室に限られず、民族宗教として全土に広まったのである。編年史の記述でいえば、モンゴルの地に仏教が「昇る太陽のように広まった」のである。アルタン・ハーンがフビライをハーンの理想像として敢行した一連の改革は、モンゴルの「黄金家族＝ブッダ」合一のアイデンティティの形成を決定的にしたのである。

そして、本論は17世紀の編年史の重要性を確認するこうした作業を通して、モンゴル史における「モンゴル・オルス」という重要な時代に対する従来の研究の基本姿勢を正す必要性を強調した。